

樋口一葉入門（一）

植村邦正

An Introduction to Ichiyô's Works (1)

KUNIMASA UEMURA

まえがき

本稿は樋口一葉の小説を読もうとする者に対し、全作品22編についてその梗概を示すとともに、その小説の中に古典・和歌・俚諺俗語などがどのように取り入れられているかを述べ、また初期作品から後期作品へその書き方がどのように変化して行くかを述べることによって、一葉研究への導入を計ろうとするものである。

〔注〕以下「明治10・3」などは「明治10年3月」などの略称

学歴ならびに教養の大略

明治10（6才）秋、寺小屋風の私立吉川学校で、小学読本・四書素読を学ぶ。

明治11・6（7才）吉川学校下等小学校第八級卒業（現在小学一年修了）。このころより、土蔵の中で、親にかくれ、草双紙（婦人・こども向きにかなで書かれたさし絵入りの通俗読物）を耽読。ために近視となったという。

明治16・12（12才）上野池の端の青海学校小学高等科第四級（現在の小学校五年前期）を首席で卒業（現在なら修了）。ここで、母の反対で上級進学を断念する。

明治17（13才）父の知人和田重雄に和歌の通信教授を受ける。また父の知人松永正愛の妻の許で裁縫を習う。

明治19（15才）中島歌子の萩の舎塾に入門。和歌・習字・古典を学ぶ。

明治23（19才）5月～9月、萩の舎の内弟子となる。

明治24（20才）半井桃水を尋ね、以後小説の師と仰ぐ。

明治25（21才）桃水との師弟関係を萩の舎で曲解され、暫く交わりを絶つ。

明治27（23才）萩の舎の助教（師範代）となり、和歌・古典その他を教える。

明治28（24才）4月より家庭にて希望者に和歌・和文（源氏物語など）を教授しはじめる。

以上の経歴のうち、彼女の小説創作に大きな影響を与えたものは、

- (1) 古今・新古今をはじめ八代集。また自ら歌人であったこと。
- (2) 源氏物語・枕草子・徒然草などの古典、および四書などの漢籍。
- (3) 草双紙、それから浄瑠璃・浮世草子その他の庶民文芸。
- (4) 紅葉・露伴の文学
- (5) 文学界同人との交流。川上眉山等の硯友社一門の一部の人との交流。
- (6) 父・兄を早く失い、一家の支柱として母・妹をかかえ、終生貧乏に苦しめられたこと。
- (7) 桃水を愛し、また許婚の渋谷三郎に裏切られたこと。

(8) 萩の舎に入門したこと。

(9) 父母の影響から、気位高く、自尊心が強かったこと。

一葉と和歌など

明治19年15才で萩の舎に入門、和歌・古典を学ぶようになって以来、時に師中島歌子に対し、その人柄や歌風に批判的なことはあっても、ほとんど終生師弟の縁は続いている。同門の姉弟子田辺龍子（後、田辺花圃）、伊東夏子（後、田辺夏子）とともに三才女といわれていた。

今日、一葉の和歌は、約3500首程残っている。中島歌子の歌風は、江戸末から明治中期にかけて盛んであった香川景樹の桂園派で、古今集を重んじ、調べを基調とした平易・清新を旨とするものであった。従って一葉の歌も大体それと同じで古今集を中心とし、八代集に関連があると思われるものが極めて多い。

(1) 題詠の歌が比較的多い。これは題詠を通して架空の世界を作り出すことを学び、それによって文学創作法を身につけたものと言える。ちょうど尾崎紅葉が小説作法を会得するために俳句を学んだように、一葉も結果的には小説作法のために和歌を利用したとも言える。例えば「被厭恋（厭はるる恋）」という題で、

つらからぬ人もある世になどもかくいとふ方のみ恋しかるらむ
という一葉の歌がある。「厭はるる恋」というのは、一葉の場合、「きらわれる恋」ではなく、苦しい、悲しい恋のため、いっそ死にたいような、つきつめた愛情をいっている。小説「にぎりえ」におけるお力が、一方では本気に愛してくれ、自分も心ひかれる男がおりながら、妻子もある源七をあきらめようとしてあきらめきれないで悩んでいるような場合がそれである。これなど歌の内容と「にぎりえ」の骨子とが同じである。

(2) 古今集・新古今集を中心として、八代集の中で一葉の和歌の本歌だと想像されるものが500首ほどある。例えば、

青柳のいとよりよりかたよるは霞の奥も風や吹くらむ（霞中柳）
「青柳のいと」は糸のように細い柳の芽。「よりより」は「時々」の意、「かたよる」は「いと」の縁語。この歌の本歌と想像されるものは、

青柳のいとよりかくる春しもぞ乱れて花のほころびにける（古今一春歌上・紀貫之）
よのなかに人のなさけのなかりせばものあはれは知らざらましを（塵中日記）
この歌の本歌と想像されるものは、

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし（古今一春歌上・在原業平）
夕さればおぎの葉ごとに白露のふり出で鳴く鈴虫の声
この「ふり出」は「声高く鳴く」の意。「おぎの葉ごとに白露の」は次の「ふり」にかかる序詞。この歌の本歌と想像されるものは、

うめの花散るてふなべに春雨のふりてつ鳴く鶯の声（後撰一春歌上）
薄く濃く染むる紅葉に知られけりつらなる枝のころころも（紅葉浅深）
この歌の本歌と想像されるものは、

薄く濃き野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え（新古今一春歌上・宮内卿）
その他、枕草子や源氏物語等の文章の一部を借りた歌も多い。これも本歌取りと同じに考えてよい。

夕月のかげはいかにとしの簾^{すだれ}かかぐる袖にうめが香ぞする
これは枕草子282段に、ある雪の朝、中宮が清少納言に向かって「香炉峰の雪はいかならむ」と

おっしゃった。清少納言は白氏文集の「香炉峰雪撥簾看」の詩を踏まえてのお尋ねだと判断して、御前の簾をかかげた話によったもの。

小車の跡こそみゆれ夕がほの花咲きにほふしづが門辺に

これは源氏物語の夕顔の巻に、夕がほの咲く家の前に車をとめて光源氏はその花を一枝宿のあるじに所望された時の情景を踏まえたもの。

以上を考えてみるに、これは一葉が古歌や古典の文章を模倣したと考えるのは当たっていないので、むしろ新古今集に多い「本歌取り」の手法を用いたと見る方が適当である。「本家取り」とは古い有名な歌や、時に詩や古典の中の文句を素材にとり入れて、新しく自分の歌を作ること、本歌とはその素材として利用された歌などをいう。

(3) 一葉の小説は和歌・古典を離れて考えることはできない。一・二の点をあげれば、枕詞・序詞・縁語・掛詞等の修辞法をふんだんに用いているのは、主として和歌から学びとったものであり、畳み込むような対句等を盛んに用いているのは、美文調の古典等から学びとった手法である。

これらは初期から中期にかけての作品に多用されており、しかも単に美文調の文を作り出すために用いたものが多く、内容より形式美をあらわすのに役立っている。が、後期になると、それらが減って、気取らない自然の表現に変わってくる。それを二・三の実例で示すと、

① 枕詞

新玉の^{のど}と^しの始め長閑けからず……。 (うもれ木七)

青柳のいと^{いと}優しく出れば……。 (うもれ木二)

この「いと」は「青柳の」を受けるとともに、「優しく」の連用修飾語となっているから掛詞でもある。

② 掛詞

瓦に生ふる草の名の忍^{あやまり}ぶ昔はそも誰れか。 (やみ夜一)

世は誤の世なるかも、無き名取川波かけ衣、ぬれにし袖の相手といふは……。 (雪の中)

これは「無き名を取り」と地名「名取川」を掛ける。「名取川」「波」「かけ」「ぬれ」が縁語。「衣」「袖」も縁語である。

廻^{おほもん}れは大門の見返り柳いと長けれど……。 (たけくらべ一)

③ 縁語

お近が願ひは不二の嶺の上もなく立ちのぼれるに、身は麓の裡に交れる如く……。 (花ごもり一)

駿河台の紅梅町にその名も薰^かほる明治の功臣、竹村子爵との尊称は千軍万馬のうちに含みし、つぼみの花の開けるにや……。 (たま櫛中)

過ぎたるは及ばざる二人連とは生僧^{つれ}や、車は一人乗^{あひにく}なるを……。 (別れ霜六)

④ 序詞

世は塞翁がうまき事して幾歳すぎし……。 (別れ霜二)

洩瀨ことなる飛鳥川の明日よりは何とせん。 (別れ霜三)

これらは同音による序詞

⑤ 対句

恨めしき時、くやしき時、はづかしき時、失望の時、落胆な時、……。 (やみ夜四)

棹さす小舟の波のうちにも、嵐にむせぶ山のかげにも、日かげに疎^{うと}き谷の底にも、……。 (やみ夜四)

⑥ 古典の文句や俚諺俗語・古歌等を取り入れたもの。

桂川の幕が出る時はお半の背中に長右衛門と唱はせて……。 (わかれ道中)

これは、菅原専助の世話浄瑠璃「桂川連理柵」の桂川道中のくだり「桂の川水に浮名を流す二人づれ、お半をせなに長右衛門、あふせそぐはぬあだ夢を」から取っている。

紅葉のあるお邸と問へば、……中の橋のはし板とどろくばかり……。 (暁月夜一)

これは謡曲「橋弁慶」の「五条の橋の橋板をとどろと踏みならし」などによるか。

もとより広き家の人気すくなければ、……俗にくだきし河原院もかくやとばかり、夕顔の君ならねど、……。 (やみ夜一)

これは源氏物語「夕顔」の巻の情景を踏まえている。

花降り楽きこえて……。 (別れ霜二)

これは謡曲「羽衣」の「虚空に花降り音楽聞こえ、霊香四方に薫ず」から取っている。

以上は古典より取ったもの。

独活の大木は役に立たない。山椒は小粒で珍重されると高いことをいふに……。 (わかれ道中)

ひねる畳の塵よりぞ山ともつもる思ひの数々 (闇桜中)

物いへば眼口にうるさき蚊を払ひて……。 (たけくらべ二)

焼棒杭に何とやら、又よりの戻る事もあるよ。 (にごりえ一)

以上俚諺俗語より取ったもの。

今年も空しく春くれて衣ほすてふ白妙の色に咲く垣根の卯の花……。 (たま櫛上の一)

これは新古今三夏歌・持統天皇御歌より。

秋の夜草葉にもろき白玉の露と答へて消えかぬる身を……。 (別れ霜十四)

これは新古今八哀傷・業平朝臣の歌より。

わが物なれば重からぬ傘の白ゆき往来も多くはあらぬ片側町……。 (別れ霜六)

これは「わがものと思へば軽し傘の雪」からとった。この句は其角の句をかえたもの。

以上は和歌・俳句よりとったもの。

他に漢詩文・俗謡・故事等からも多く取っているが、それらについては各作品のところに詳しい。

小説作品の解説

一葉の作品はすべて短篇小説で、完成されて発表されたものは21篇、他に未完のもの1篇がある。それらは大よそ習作時代と完成時代のものに分けることができる。ここでは習作時代をさらに2分し、初期・中期とし、完成時代を後期とし、三期に分けて考えることとする。理由は各期のところで述べる。

一葉が小説を書き初めたのは、萩の舎における姉弟子、田辺花圃が、坪内逍遙の推せんで雑誌「都の花」に「藪の鶯」(明治21)をのせた事に、勝気の彼女が刺戟されたためである。彼女の作品はほとんど身辺の出来事を題材とし、しかも貧しい、悲しい女性が主人公であるものが多い。

一葉の文章は雅俗折衷文といわれる。雅俗折衷文とは、地の文を雅文(和文)で会話の部分で口語で書くものであるが、紅葉が井原西鶴に倣って、会話文をも文章中に書き込み、全部クォーターション(quartation)をぬいた雅俗文体を「伽羅枕」(明治23)で試みてから露伴・一葉なども同じ文体を用いた。紅葉が文体をかえた後も一葉だけは、「この子」の一篇を除いて最後までこの方法を改めなかった。

次にそれらの作品を発表順に取り上げて解説することとする。

(1) 初期（明治25・2～明治25・10）

この当時の文章は、全く古めかしい物語調で、和歌の修辞法をふんだんに操って綿々と続ける文章で、また戯作風な不自然な誇張に過ぎた描写のところも多い。途中から友人の紹介で東京朝日新聞の小説記者半井桃水について小説の書き方を学ぶようになるが、桃水は彼女の余りに和文（雅文）めかしい所を直し、もう少し読者受けのする娯楽向きの通俗小説の手法をとるようすすめ、枕詞・縁語等で綴る平安朝文学の模倣を否定し、近代のスタイルの文にするよう極力指導した。

初期のものは概して類型的で、技巧に過ぎ、紅葉・露伴・西鶴等の影響下に気負った強い調子がある。

作品名	掲載書目	掲載年月
① 闇桜	武蔵野	明治25・2
② 玉櫛	全上	全25・4
③ 別れ霜	改進新聞	全上
④ 五月雨	武蔵野	全25・7
⑤ 経づくえ	甲陽新報	全25・10

① 闇桜

（梗概）中垣一つ隔てた中村・園田両家には、それぞれ一人ずつ子供がいる。中村家には一人娘の千代（16才）、園田家には跡取り息子の良之助（22才）がおり、まだ学生である。2人は幼い頃から会えば喧嘩ばかりしているくせに、仲のよい、友達からからかわれて顔赤らめる可憐な少年少女であった。

それが成長した今は、千代は良之助に恋心を覚えるようになっているが、それを打ち明けられないで、どっと恋わずらいの床についてしまう。それを知った良之助は、なぜもっと早く打ち明けてくれなかったかと悔む。

病篤い千代の病床を見舞った良之助は、やせ衰えて見るかげもない彼女を見る。醜い姿を恥じてか千代は「お詫は明日」の謎のことばを言って、良之助に早く帰ってくれるようしきりに訴える。それではと良之助が立ち出る夕闇の中に桜がほろほろと散りかかり、そこに彼女の死を暗示している。

- 桃水の指導で書き上げた最初の発表作。
- 若い男女の悲恋物語で、後の「たけくらべ」の原型と見ることができる。
- 文章は戯作者系統の饗庭篁村の「窓の月」（「むら竹」第一巻・明治22）や、尾崎紅葉の「恋のぬけがら」（明治23・11）、幸田露伴の「対どくろ」（明治23）の影響が感じられる。特に話の筋は「対どくろ」に、話の展開と人物の設定のしかたにおいては「恋のぬけがら」に似ている。
- 最後の場面は、明治25春自作の「風もなき軒端の桜ほろほろと散るかと思れば暮れそめにけり」（夕落花）の和歌と文章が酷似する。作成時期が同じであるから、何等かの関連があろう。また次の和歌をも連想させる。

山里の春の夕暮来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける（新古今二春歌下・能因法師）

- この小説の千代と良之助が年が六つ違いであることと、許婚であって、後裏切られた渋谷三郎と一葉が六つ違いである事などが、文の内容と照合して、これを書く時の一葉の意識に投影していると感じられる。
- 文中に浄瑠璃・歌舞伎に関係のある朝顔日記や、「西鶴五人女」の八百屋お七の一部が取り入れられている。
- 本文に関係のある俚諺・和歌
 - ・掌中の珠せんだん ・梅檀かんばは二葉より芳し ・塵も積もれば山となるはらわた ・腸を断つあまびと
 - ・海士人の袖にほふらしわたつみのかざしの花の春の浦風（続拾遺二春下・源定房）

- ・あしたづの^{よほひ}齡しあらば君が代のちとせの数はかぞへとりてむ（続拾遺十賀・藤原道長）
- ・袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ（古今一春上・紀貫之）
- ・おもひきや雲居の月をよそに見て心の闇にまどふべしとは（金葉九雜上・平忠盛）
- ・玉のをの長きためしに引く人も消ゆれば露にことならぬかな（新古今八哀傷・藤原長家）
- ・君こふる涙しなくはから衣むねのあたりは色もえなまし（古今十二恋二・紀貫之）
- ・思ひつつ寝ればや人の見えつらん夢と知りせば覚めざらましを（古今十二恋二・小野小町）
- ・恋ひ恋ひて稀にあふ夜の暁は鳥の音つらき物にざりける（古今六帖二）
- ・春はまづ東路よりぞ若草の言の葉つげよ武蔵野の原（古今六帖五）
- ・みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに（古今十四恋四・源融）

② たま^{だすき}襪

（梗概）三千石の旗本青柳右京三世の孫青山糸子（19才）、今は両親なく女中と二人ひっそりと暮らしている。後見は松野雪三（35～6才）といて、昔の青柳家の家来筋にあたる男で、糸子に何くれとなく尽くしている。

ある夏の夜、糸子が蛍を捉えようとして団扇を垣根の外へ落とす。すると一人の美少年があらわれてそれを拾って渡す。糸子はその青年に恋心を覚える。雪三も最初は米子を妹とも娘とも思っていたがいつの間にか恋にかわっている事を本人自身は知らない。

その美少年は明治の功臣、竹村子爵の次男緑であった。こちら糸子の事が忘れられず母にその恋を打ち明ける。それで竹村家より糸子への縁談の話の後見役の雪三の所へ持ってくるが、糸子が隣室で聞くと知らず、思わず糸子は私と結婚する筈の女だと断言してしまう。これを知った糸子の驚き、二人から愛される事を知って悩み、この上は身を捨てるより外はないと書置きをしたためる。この文（手紙）、明日は誰の手に落ちて、ありし日の記念と見るであろうかと結び、死を暗示している。

- 題名は自己の「両方恋」と題する和歌によって名づけたものという。

などでかくひとつ心を玉だすき二方にしも思ひかけけん

歌意は、「どうしてこのように二人の男性を愛するようになったのだろうか」の意。「玉だすき」は「かく」の枕詞であるが、それを題目としたものであろう。

- この女主人公は源氏物語の中の女性「浮舟」を連想させる。浮舟は薫大将に愛されながら、^{におうのみや}匂宮と誤って通じ、煩悶の末入水自殺を計るという悲恋の女主人公である。

- これも露伴の「対どくろ」（明治23）の影響が見られる。「対どくろ」のお妙は、若殿の死にあい、人をいとい、恋をいとうて山中へ隠棲する。

- 本文に関係のある俚諺・古典・漢籍・和歌など

- ・五里霧中 ・子故の闇に迷う ・磯^{あわび}の鮑の片思い
- ・なやましきに牛ながらひき入れつべからむ所をと宣ふ（源氏・帚木）
- ・莊周夢に胡蝶となり（「莊子」齊物論）
- ・春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山（新古今三夏歌・持統天皇）
- ・夕されば蛍よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき（古今十二恋二・紀友則）

③ 別れ霜

（梗概）新田運平と松沢儀右衛門は先祖を同じくする同業の呉服商である。運平には一人娘のお高（16才）、儀右衛門には一人息子の芳之助（26才）がおり、二人は将来を約束した仲である。

ところが腹黒い運平は番頭と計り、松沢家をおとし入れ、破産させてしまう。芳之助はそ

のため病気になった両親をかかえ、家賃の取立てに苦しめられながら、健気にも車夫となって働いている。娘からは手紙一本来ない。ある日二人はばったり出会う。女は親の監視がきびしく手紙もかけなかった事を詫び、変わらぬ胸の内を訴えるが、男は取りすがる女を足蹴にして去って行く。思い余って、お高は習い事の稽古仲間である錦野はな子に相談しようとして尋ねるが、実ははな子の兄の医学士と自分との結婚話が内々で進んでいると聞き、急いでそこを飛び出す。

さてある雪の日、客を拾う車夫が街頭にみすばらしいなりで立ち尽くしている、運命のいたずらか、折しもお高は音曲の師匠のもとから帰ろうとして偶然その車に乗り合わせる。そんなことがあって後、二人は世をはかなみ先祖の墓前で心中しようとする所を、新田の番頭に女だけ助けられるが、男は自刃して果てる。

それから女は座敷牢につながれる。しかし女は一計を案じ、心をすっかり入れかえ、親の意見に従うよう見せかけ、両親を安心させ牢を出される。ところがある霜の夜、女は男の墓前で自らの命を絶って後追心中をする。

- 本文に關係のある俚諺・和歌・漢詩文
- ・覆轍を踏む ・鳶が鷹を生む
 - ・光陰矢の如し ・月に叢雲、花に風
 - ・隴を得て蜀を望む ・鶴は千年亀は万年
 - ・咽元過ぎて熱さ忘るる ・内兜を見すかし
 - ・寝耳に水 ・猿も木から落ちる
 - ・座して食へば山も空し ・膝とも談合
 - ・情は人の為ならず ・恥の上塗り
 - ・牛を馬に乗りかえる ・言わぬが花
 - ・万緑叢中紅一点 ・隠徳あれば陽報あり
 - ・煩惱の犬は追へども去らず ・医は仁術
 - ・焼野の雉子、夜の鶴 ・眉毛をよむ
 - ・莊周夢に胡蝶となり（「莊子」齊物論）
 - ・滄海変じて桑田となる ・雲泥の相違（後漢書）
 - ・汗牛充棟（柳宗元陸文通墓表） ・朝三暮四の術（列子・黄帝篇）
 - ・人間万事塞翁が馬（淮南子） ・疵持つ足
 - ・疑心暗鬼を生ず ・子故に迷ふ親心
 - ・地に在っては願はくは連理の技とならん（白楽天・長恨歌）
 - ・香炉峰の雪は簾を撥げて見る（白楽天）
 - ・人尺地の間に生きる、白駒の隙を過ぐるが如し（莊子）
 - ・つつみつの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざる間に（伊勢物語23段）
 - ・くらべ来し振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき（伊勢物語23段）
 - ・白玉かなにぞと人の問ひしとき露と答へて消なましものを（新古今八哀傷・業平朝臣）
 - ・世の中は何か常なる飛鳥川きのふの渚ぞ今日は瀬になる（古今十八雑歌下・読人しらず）
 - ・虚空に花降り音楽聞こえ（謡曲・羽衣）
 - ・わが物と思へば軽し傘の雪（其角の句をかえたもの）

④ 五月雨

（梗概） 富豪梨本家には優子（19才）という娘がおり、侍女のお八重（18才）とまことの姉

妹のように仲よく暮らしている。

ある時優子は杉原三郎という青年を見そめ、恋心^{もだ}黙しがたく、お八重に恋文の橋渡しを依頼する。

ところが、三郎は実はお八重の初恋の人であった。進退ここに極まったお八重は如何したものと思うが、主人の為に身を引こうと、三郎が優子の病気見舞に来た折——それは五月雨のしとしとと降る日であったが——思い切って優子の手紙を渡す。その返事はいずれとも分らない一首の和歌であった。

茂り合ふわか葉にくらき迷ひかなみるべきものを空の月かけ
その後男のさっぱり訪れないのを二人はそれぞれの女心をいためていた。優子は優子で、お八重の初恋の人とは夢にも知らないから、「いつかは月の光を見る時もありましょう。それを待っていてください」と理解し、わずかな望みを託し、一方お八重はお八重で、「お前が邪魔で見るべき月の光も見えない——優子と一緒に成れない」というのではなからうかと悩みつづけている。

ある日、ふと二人が散策に出た時見た一人の若い僧、笠のはしから顔を見た二人はアッと驚いた。

○ この男こそ杉原三郎で、二人の女性に愛され、何れをとるべきかを悩み抜いた末の出家であろうと想像される。

○ 「たま櫛」の糸子が二人の男性に愛されて死を選んだのと同巧異曲である。

○ 本文に関係のある俚諺・漢詩・和歌など

・兄弟垣にせめぐ　・水魚の交り

・主従は三世　・いすかの嘴

・柳に風と受け流す　・待てば甘露

・義は泰山より重く、命は鴻毛よりも軽し（史記）

・胡蝶の夢（「莊子」齊物論）　・僧は敲く月下の門（賈島詩）

・春がすみ立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる（古今一春歌上・伊勢）

・人知れず思ふ心はあしひきの山下水の湧きやかへらん（新古今十一恋歌一・大江匡衡朝臣）

・筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり（新古今十一恋歌一・源重之）

⑤ 経づくえ

（梗概）医科大学の波崎学士は外科の助手をしている。結婚話も多いが、当人はそれを見向きもせず、香月そのの家に絶えず通っている。

そのの父香月左門と学士の父は旧幕臣で、維新の変に討死し、二人はそのわすれ形見だったのだ。

そのの母は彼女の十四才のとき死に、今は女中のお民と二人ぐらし。医学士はそのに読書算術を教えるが、当人はそれをいやがり、うるさがる。それをいつもお民が、波崎学士の恩を十六才になった彼女に諄々と説いて聞かせる。

波崎はいよいよ札幌の病院長として赴任することになった。年頃になった彼女は、別れと聞いて、急に悲しくなって障子の向こうにかくれて泣いている。

お別れに来た男の去ったあと、何気なしに着物のたもとに手をやると、先程波崎のしていた指輪が入っているのを見て、彼の心を知り、恋心を募らせる。

波崎は札幌でチフスにかかり三十一才の若さでこの世を去る。そのはますます恋の悲しさに堪えられず、人のすすめる結婚もことわって、亡き波崎の菩提をとむらっている。

- 正しいかなづかいでは「経づくゑ」とあるべきところ。
- 野尻理作のすすめで「甲陽新報」に春日野しか子のペンネームで載せる。
- 紅葉の「色ざんげ」(明治22・4)は雅俗折衷文ではあるが、言文一致体にやや近づけた文体となっている。一葉の「経づくゑ」を見ると冒頭の書き出し、人物の素姓を語るあたり、極めて類似するところがある。
- 一葉も今までの文体とはやや異なり、気負った所や誇張した所も少なく、素直でリズムカルなものになっている。中期の一葉へと文体が変化して行くあとを伺うことができる。
- 本文に関係のある俚諺・古典・漢詩文
 - ・ 隠すより現はるる ・ 灯台下暗し
 - ・ 鼻毛をよむ ・ 後足で砂
 - ・ 猿も木から落ちる ・ お茶を濁す
 - ・ 白羽の矢が立つ ・ 枯木に花咲く
 - ・ 膝とも談合 ・ 掌中の珠
 - ・ 前門虎をふせぎ後門狼を進む。(趙雪航「評史」)
 - ・ 人木石にあらねば時にとりて物に感ずることなきにあらず。(徒然41段)
 - ・ 天に在りては願はくば比翼の鳥とならん、地に在りては願はくば連理の枝とならん。(白居易・長恨歌)
 - ・ 柳暗花明又一村(陸游)
 - ・ 立ちわかれいなばの山の峯に生ふるまつとしきかば今帰りこむ(古今八離別歌・在原行平朝臣)
 - ・ ある時はありのすさびに憎かりき無くてぞ人は恋しかりける(古今六帖)

(2) 中期(明治25・11～明治27・11)

半井桃水との師弟関係が萩の舎の中島歌子をはじめ、門下生たちに曲解され、師友から忠告を受けたため、桃水に事情を告げ、しばらく師弟の関係を絶った時代に当たる。

この時期の作品も、初期の作品と同じく、習作時代のものといえるが、多少小説らしい進歩のあとが見える時代である。

作品名	掲載書目	掲載年月
⑥ うもれ木	都の花	明治25・11～12
⑦ 暁月夜	全 上	全 26・2
⑧ 雪の日	文学界	全 26・3
⑨ 琴の音	全 上	全 26・12
⑩ 花ごもり	全 上	全 27・2～4
⑪ やみ夜	全 上	全 27・7～11

この頃彼女は既に桃水を愛する心になっていた。師桃水と離れ、淋しく悲しい気持ちに沈んでいたが、一方生活の苦しさも相変わらずで、何とか小説家として一人前になろうと必死なものがあつた。

この期の作品はいろいろの人の善意と励ましによって、漸く世に出た作品どもであるが、特に後半は若い文学界の人々、平田秃木・馬場孤蝶・星野天知・上田敏などとの交流がはじまり、発表の機会も容易になるとともに、文学界同人の抒情性をも文章の中に盛ることとなる。同時に彼等を通じて小説界の空気も知り、時代も自我解放・封建性の打破に向かいつつある事も知り、それが少しずつ小説にあらわれるようになる。

この期の一葉は人間的にも格段の変化を遂げたことが伺われる。半井桃水との初対面の頃には、顔赤らめ胸ときめかした可憐な一葉であったが、そして貧乏は相変わらず彼女について廻っていたが、大の男を手玉に取るくらいのしたたかな女性に成長している。中期の半ば過ぎ吉原遊廓近い下谷龍泉寺町に転居、荒物と駄菓子屋を開業し生活の糧を得ることとなった頃には、借金も平気のできるようになった。しかし、色町近くにいても、相変わらず気位は高く、

身を持ちくずすような事は決してなかった。

さらに明治20・12に長兄泉太郎を肺結核で亡くし、明治27・7には従弟の樋口孝作が業病のためこの世を去った事により、樋口家に生まれた我が身の宿世をそぞろに悲しんだことが、主として後期の文章に深刻味を増す一つの動機になっている。

⑥ うもれ木

(梗概) 陶工入江籙三は妹お蝶と二人暮らし、ある時昔の同門の新次こと今は篠原辰雄と名のる男とひょっこり出会う。彼は陶工の技倆は優秀であったが師の金を使い込んで逃げたもの。籙三は初めは相手にしなかったが、今はある富豪の娘婿となり、前非を悔い、昔の罪亡ぼしのため社会事業等にも巨額の金品を寄付して尽くしているなど、言葉巧みに持ちかけ、人のよい籙三兄妹はすっかり信じ込み、意気投合してしまう。そのため陶工修業や陶器製作に要する費用も一切出してもらい、おまけに辰雄はお蝶にも取り入り恋仲となる。しかし辰雄は一旦事業がうまくいかなくなると、もとの本心をむき出しにして、自己の野望のため、純情のお蝶を甘言をもってある出資者の人身御供にあげる。それを知った籙三は烈火のごとく怒り、自ら精魂こめて作り上げた花瓶を庭にたたきつけて砕いてしまう。

○ 文章は露伴の「風流伝」(明治22)、「一刹那」(明治22)、「一口剣」(明治23)に類似するが、中でも「風流伝」に最もよく似る。

○ 題材の入江籙三は次兄虎之助がモデル。

○ 当時すでに有名であった田辺花圃の斡旋で雑誌「都の花」に載る。

○ 「うもれ木」の題名は、明治23~24「しがらみ草子」にのった森鷗外の翻訳小説「埋れ木」によったものか、あるいは次の平家物語四の源三位頼政の辞世の歌か、浄瑠璃の盛衰記などによったものか。

埋木うもれぎのはな咲く事もなかりしに身のなるはてぞかなしかりける。

○ 本文に関係のある俚諺・成語・漢語・和歌など

- ・金の世の中 ・高みで見物 ・医は仁術
- ・色の白いは七難かくす ・傍杖そばを食う
- ・金が仇の世の中 ・倒れて後巳む(礼記)
- ・花を持たせる ・口車くぐるまにのせらる
- ・風前の塵 ・胸三寸に納まる ・角を折る
- ・画餅べいに帰す ・精神一到何事か成らざらん(朱子)
- ・小の虫を殺して大の虫を助ける(淮南子)
- ・貧乏暇なし ・言わぬが花 ・気脈を通ず
- ・水火を辞せず ・五十歩百歩
- ・苦あれば楽あり ・錦上花を添える
- ・博愛はくあい之を仁と謂ふ(韓愈) ・形影相伴ふ
- ・百貫のかたに笠一介 ・膝とも談合
- ・我田引水 ・親は一世、師は三世
- ・娘(鬼も)十八、番茶も出花
- ・跡は野となれ山となれ ・腸を断つ
- ・蟻の穴から堤もくずれる
- ・蛟龍雲雨を得ば池中の物にあらず(呉志、周瑜伝)
- ・春風李花花開くの夜(長恨歌)

- ・不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し（論語・述而第七）
- ・君子は交はり絶ゆとも悪声を出さず（史記・樂毅伝）
- ・四海の内皆兄弟なり（論語・顔淵）
- ・徳は孤ならず、必ず隣あり（論語・里仁第四）
- ・三年鳴かず飛ばず（史記・滑稽伝）
- ・恋の山しげき小笹の露わけて入りそむるより濡るる袖かな（新勅撰集一恋一・顕仲）
- ・床は海枕は山となりぬべし涙も塵もつもるうらみに（続後拾遺十四恋・藤原家隆）

⑦ 暁月夜

（梗概）香山子爵家の令嬢一重（20才）は花はずかしい美女であるが深窓にひそんで、結婚話にも父母ともども一切耳をかさない。

それを聞いた森野敏（24才）という学生が、どんな女か、なぜ結婚しないか、見てやろうと物好きから学業も捨てて吾助と名をかえて庭男として入り込む。しかし一目その女を見て恋心を覚える。

一重には甚之助という小さい弟がいるが、吾助はこれを手なずけて女に和歌や恋文の橋渡しを頼むが、女からは何の返事もない。

しばらくして女はここを去って鎌倉の別宅に侍女をつれて移り住むという噂を耳にし、女が明日いよいよ家を出るとする前の晩、矢も楯もたまらず吾助は女の所に勇を鼓して会いに行く。

女はお心は嬉しいが私には結婚できぬ訳があるのと言って次の話をする。

私はかって父の馬廻り役の下僕六三（ろくさ）といい仲になり、子どもまで設けたが、その子は死に、六三は申訳なさき大川に身を投げて死んだ。今またあなたをも苦しめた事を知って己れの罪の深さを悟り、これから鎌倉に隠棲するのだという。

この長物語に夜は白々と明けはじめ鳥の声がかまびすしい。さて敏と姫とはこの先どうなったか誰も知らない。

○ 歌語的な題名である。これも田辺花圃の推せんで「都の花」に載せる。

○ 露伴の「対どくろ」（明治23）の影響がある。恋人桃水と別れた時であり、「厭ふ恋こそ恋の奥なりけれ」という明治26・7・5の「につき」に書かれた彼女の思想をもち込んだものであろう。

○ 紅葉の「此ぬし」（明治23・9）と似た内容の所もある。

○ 本人と関係のある俚諺・古典・漢語・和歌など

- ・胡蝶の夢（「莊子」齊物論） ・隠すより現はるる
- ・思ふ念力岩をも通す ・いざ鎌倉
- ・五条の橋の橋板をとどろと踏みならし（謡曲・橋弁慶）
- ・いたづらに恋の奴になり果てて（謡曲・恋重荷）
- ・人木石にあらねば、時にとりて感ずることなきにあらず（徒然41段）
- ・奇貨おくべし（史記・呂不韋伝）
- ・風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬ我が思ひかな

（新古今十七雑歌中・西行法師）

- ・陸奥にありと言ふなる名取川なき名とりては苦しかりけり（古今十三恋歌三・壬生忠岑）
- ・淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜ねざめぬ須磨の関守（金葉冬・源兼昌）
- ・有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし（古今十三恋歌三・壬生忠岑）